

論文の和文要旨	
論文題目	中国内モンゴルにおける集合的記憶 ーモンゴル民族の英雄ガーダー・メイレンを事例としてー
氏名	包宝海
<p>本論文はモンゴル民族の英雄とされるガーダー・メイレン(Gada Meiren、1892～1931、漢語表記は嘎達梅林[Ga Da Mei Lin])を事例として、中国内モンゴルにおける集合的記憶の動態を考察するものである。</p> <p>ガーダー・メイレンは1929年末から1931年代初頭まで、内モンゴルのホルチン地域で、漢人農民による過度な農地開墾に反対して武装蜂起を起こし、1931年2月12日(旧暦)に熱河省派遣の李守信の部隊によって鎮圧され、戦死した実在の人物である。彼は、モンゴル人の土地と利益を守るために戦ったとされており、そのためにモンゴルの人びとのあいだでは一定の尊敬を集めつつ、その名が記憶されている。</p> <p>今日の内モンゴルの公式的な歴史叙述の中では、「ガーダー・メイレン蜂起」が「階級闘争」の枠組みで位置づけられ、「封建的蒙古王公」と「反動的な軍閥」に対抗した運動と評価されている。しかし、ガーダー・メイレンの活動に関する評価は時代によって異なっており、彼に纏わる記憶のポリテックスも極めて複雑である。</p> <p>本論文では、これまでの先行研究ではほとんど使われていない奉天で出版された『盛京時報』、『東三省民報』などの新聞とそれ以外の関係文書に基づいて、歴史事実としての「ガーダー・メイレン像」の再構築を試みた上で、「ガーダー・メイレン蜂起」を広義での「集合的記憶」になりつつある事例として捉えている。そして本論文は、それに関するウリゲルト・ドー、映画、小説など過去の表象をあらゆる文化的存在に着目し、内モンゴルにおけるガーダー・メイレンの表象とその変遷を分析し、集合的記憶としての動態を考察した。ここでは、記憶論(メモリースタディーズ)とオーラル・ヒストリーの研究方法を用いて、「記憶の文化的・社会的再生産」のあり方を掘り下げ、社会的、文化的側面から構築・変容する「ガーダー・メイレン像」と、「記憶する主体(モンゴル人)」から語り出される「ガーダー・メイレンの語り」を軸として、「個人の意識と集団の社会性の相互作用」によって、作り出されている集合的記憶の形成過程と実態を明らかにした。</p> <p>第1章では、モーリス・アルヴァックス(Maurice Halbwachs)(1877-1945)の「集合的記憶論」とその展開を紹介し上で、中国、とりわけ、内モンゴルにおける「集合的記憶論」の研究動向について論じた。現在、アルヴァックスによって提示された「集合的記憶」の概念は、歴史学ばかりでなく、民俗学、社会学、文化人類学など複数の学問分野で取り上げられるようになってきている。中国において、「文化大革命」、「南京虐殺」などの重大な歴史的事件が集合的記憶の事例として研究されているが、イデオロギー的圧力により、「公式的記憶」に対抗する形で存在するマイナーな記憶や草</p>	

の根社会にける記憶の問題が軽視されているように思われる。内モンゴル地域のモンゴル研究において、集合的記憶論は導入されてきたが、集合的記憶と伝説の関わりや、記憶と現代内モンゴル人の民族アイデンティティの構築などの問題が若干論じられている程度である。

第2章では、当時の奉天で出版された『盛京時報』、『東三省民報』などの新聞を参照にしながら、「ガーダー・メイレン蜂起」の歴史的背景とガーダー・メイレンらの指導した「開墾反対運動」について若干説明した後、蜂起軍の活動の場所や戦闘の日にち、蜂起軍の規模、メンバー、行軍ルートなどについて詳しく検討した。内モンゴルにおけるガーダー・メイレンに関する伝記や資料の中では、漢人農民も蜂起軍のパートナーとして記述されているが、『盛京時報』の報道によれば、蜂起軍の攻撃の対象も地元の漢人であったことが確認できる。一方、蜂起軍の活動には地元の漢人匪賊団が加わったことは事実であり、一部の人々が蜂起軍の名義で地元の漢人とモンゴル人地主に対して、略奪行為を行ったことは否定できない。蜂起軍の主なメンバーについては、不明な点が多いが、副首頭領の陳剛、洪順(紅順)以外には天紅、高山、満天紅、三哥、和字、楽字、老梯字、雙山、三點、振字、明字、雙青、平心、莊稼人(庄家人)、占東邊などの匪賊団が蜂起軍に加わっていたことが明らかになった。

第3章では、内モンゴルの異なる時代の政治的背景とコンテキストに関連させながら、ガーダー・メイレンを「集合的記憶の根づいた場所」、つまり「記憶の場」(ピエール・ノラ)として捉え、内モンゴルの時間的枠組みで形成される複数の様相に焦点を当てて、社会共同体によって、維持され、「再記憶化(ノラ)」される「記憶の場」のあり方を解明した。ガーダー・メイレンは内モンゴルの異なる時代において異なる形で記憶され、語られていた。1930年代において、ガーダー・メイレンは国(中華民国)の政策に対抗した「モンゴルの馬賊」として批判され、弾圧された。ところが、彼は中華人民共和国が建国されるとともに、「反動的軍閥及び封建的王公」と対抗した「モンゴル民族の英雄」として評価され、尊敬されたが、文化大革命時代において、祖国の裏切り者(民族分裂主義者)として再び批判された。1978年以降の改革開放政策によって、再び民族の英雄としての「名譽回復」が行われるが、論者によって、「環境保護のパイオニア」や「草原を開墾から守るために戦った英雄」などの議論も出回っている。ノラの「記憶の場」の観点からすれば、彼は内モンゴルにおいて、一つの「記憶の場」となっていると考えられる。

第4章では、記憶論の方法を用いて、社会的表象という観点から内モンゴルにおける「ガーダー・メイレン記憶」の形成と受容のプロセスを考察し、国民国家と地域に共有され、生成され、変容される「ガーダー・メイレン像」を明らかにした。ここでは、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』のテキスト化、「ガーダー・メイレンの事跡」などの資料が編纂された経緯を、中国共産党の文芸政策、1958年の「民謡運動」と1978年の「改革開放」などの政治運動に沿って考察した。政治運動によって編纂された『ガーダー・メイレンの事跡』などの資料や、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の内容が民間芸能者のホールチによって、ウリゲルト・ドーとして歌われ、「ホーリン・ウリゲル」として語り直されることによって、再記憶化され、より広い地域で共有されるようになったことも確認してきた。内モンゴル、とりわけ、ホルチン地域におけるガーダー・メイレン記憶の形成は1930年代から始まり、1950年代から普及され、広い範囲の人々に共有されるようになったのである。中華人民共

和国初期において、ガーダー・メイレンは基本的には社会主義イデオロギーの手法に基づいて、反帝国主義(反日的)、反封建的、反軍閥的な英雄として表象されてきた。このような状況は、とくに1970年代以後の改革開放によって、変化していくのである。例えば、郭雪波によって書かれた長編小説『青旗・嘎達梅林』(2011年)で描き出されているのは、「公式的記憶」とはいささか異なり、長年に渡って忘却され、周縁化されてきた蜂起軍の生き残りの記憶や「草原を開墾から守るために戦った英雄」としての「ガーダー・メイレン像」であった。

第5章では、オーラル・ヒストリーの研究方法を用いて、内モンゴルの「草の根社会」、つまり、社会の下層にあるモンゴル人の記憶と語りをウリゲルト・ドーの内容と関連させながら分析した。分析を通じて、人々の記憶形成にはウリゲルト・ドーと上の世代や老人の語りの影響を大きく受けていることが確認できた。前述したように、中国・内モンゴルの公式的見方では、ガーダー・メイレンは「階級闘争の英雄」として有名な人物であるが、内モンゴルにおけるモンゴル人の間では、「民族的英雄」、または「民族的犠牲者」として認識される場合もある。それは社会的かつ政治的に構成される「社会的枠組み」(モーリス・アルヴァックス)として作動する「公式的な記憶」、つまり、「封建的王公」や「反動的軍閥」と抵抗した「民族の英雄」と異なる。しかし、人々の語りは非常に複雑で、多様な語りによって成り立っている。その中には、国民国家と地域に構成される「公式的な記憶」と異なる「マイナーな記憶」としての蒙地開墾によるモンゴル人の苦難の記憶や、モンゴル人と漢人の対立の語りなどがある一方で、「モンゴル人と漢人の共同の利益のために戦った英雄」、「匪賊としてのガーダー・メイレン」などの複数の語り方が含まれている。一方、草の根社会において人々は「公式的な記憶」をそのまま受け止めているのではなく、彼らは、モンゴル語のウリゲルト・ドーのイメージや、自分を取り巻く環境や空間的イメージの影響を受けていることが確認できた。